

金春流

第64回

能新

出水神社

と、き 令和7年8月2日(土)午後5時30分開場 午後6時開演

ところ 水前寺成趣園内 出水神社能楽殿 (雨天決行)

主催 出水神社

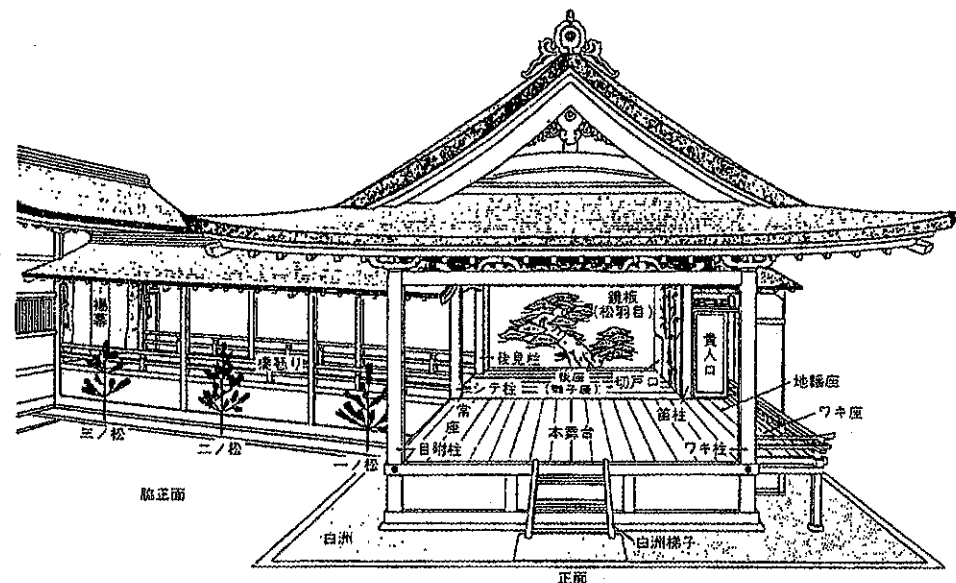
協力 金春松融会

協賛 熊本県文化協会
熊本国際観光コンベンション協会

後援 熊本県文化協会
熊本日日新聞社
熊本放送局
NHK熊本放送局

観能無料

拝観料(入園料)は午後5時30分以降無料



能舞台

☆生徒さん募集

ご一緒に稽古しませんか?
年齢性別問いません。見学大歓迎です。

申込先 (TEL)

〇九〇一九四〇五一一六四七

金春松融会事務局長 田中秀実



- ・会場では係員の誘導に従い、ご観覧ください。
- ・写真撮影のフラッシュ使用や移動等はお断り致します。

ご挨拶

平素より出水神社並びに水前寺成趣園に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

このところ地元熊本市民の方々のもとより、昨今のインバウンドの影響によるであろう海外のお客様、また日本全国から観光でのご参拝の皆様によって、おかげさまで当神社並びに当園は昭和のかつての賑わいを取り戻しつつあるように日々感じております。

薪能自体の歴史は古く、千年以上続くものもあるとされますが明治時代以降下火になった時期もあり、当神社の薪能は昭和三十四年八月に第一回が催され、今回が六十四回を数えて、全国でも有数の歴史を誇っております。

これも偏に金春松融会の皆様をはじめ関係各位の皆様の尽力の賜物と改めて深く感謝申し上げます。今回は「羽衣」という皆様にはよく知られた演目を上演致します。

熊本夏の夜の暑さはご存じのようになかなかの体感でございますので、水分補給等しっかりとした対策をとられた上で、幽玄の世界をご堪能下さいませ。

出水神社 宮司 細川 護光

能『羽衣（はごろも）』について

富士山を見晴るかす駿河の国（今の静岡県）三保の松原に降り立った天女は、美しい景色に見とれている隙に、天人の羽衣を所の漁師である白竜（はくりよう）に拾われてしまいます。羽衣が無くては、天上界へ還ることができません。天女は返して欲しいと懇願しますが、天人の羽衣と知った白竜は、なおさら返そうとはしません。天女は遂方に暮れてしましますが、天女のあまりの嘆きの様子を見て白竜は、うわさに聞く天人の舞を見せてくれたら羽衣を返してもよい、と言います。しかし、天人の舞は羽衣が無くては舞えません。先に羽衣を返して欲しいと願う天女に、白竜は一抹の疑念を抱き、羽衣を返してもらったら舞は見せずにそのまま天上界へ去ってしまうのではないかと疑います。その疑念の言葉に、天女は「いや疑いは人間にあり。天に偽りなきものを。」と応えるのです。

その言葉に恥じ入った白竜は、直ぐに羽衣を返します。やがて羽衣をまとった天女は、美しい舞を見せながら、天上界へと去って行きました。

『羽衣』は世阿弥の作と伝えられますが、能を代表する曲目として非常によく知られており、おめでたい曲としてもよく演じられていて、上演回数が多い曲ともいわれています。風景の美しさだけでなく心の美しさも謡われていることが、何百年にもわたって人々に愛されているのではないのでしょうか。

※参考文献

増田正造『能百十番』（平凡社）、小林實ほか『能楽大事典』（平凡社）

English Guide



金春松融会

秋山純晴

第六十四回 出水神社新能

番 組

芝踏之儀

高 砂

上 村 恭 徳

仕舞

清 経
キリ

網 谷 洋 志

田 村
クセ

東 軍 三

番外仕舞

春日竜神

本 田 芳 樹

半 部
キリ

本 田 布 由 樹

和泉流

狂言 仏 師

すっぱ 山 内 理 至

田舎者 田 寫 晴 雄

仏像を買い求めに都へ上った田舎者が、「仏買おう」と尋ね回っていると、これを聞いた都のすっぱ（詐欺師）が、自分は仏師だといって近づきます。田舎者にいろいろと仏像を薦め、最後は吉祥天女という仏を作ろうと決めて、明日会う約束をします。

当然、仏など作ったことのないすっぱは、翌日約束の場所に行き、持っていた面を付けて仏に成り済まして待ち受けますが、田舎者の注文に度々答えていくうちに、とうとう見破られてしまいます。

解説

秋山純晴
東忠慶
(通訳)

火入れ之式

シテ 田中秀実

能羽衣

ワキ 飯富雅介

(大) 白坂信行

(太) 田中達

(小) 古田寛二郎

(笛) 内田秋則

ワキツレ 岡

充

後見

本田芳樹
網谷洋志

村上芳明
松下謙一郎
林田孝司
上村恭徳

山村政己
本田布由樹
東軍三
秋山純晴

附祝言